

ま え が き

土木学会は今年で創立 62 周年を迎えることになった。大正 3 年 11 月に、日本工学会から分離したのであるが、工学会に属していた分を加えると 97 周年と、約 1 世紀の歴史をもつことになる。明治 18 年以降、鉱業、建築、電気、船舶、機械、工業化学が相次いで、日本工学会より分離独立した中であって、当時の土木技術者は、日本工学会即土木工学会と心得て、あえてこれを離れることがなく、ようやく大正 3 年に至って、土木学会の創立にふみきったのである。土木工学は正に人間の生活と生産のための工学であり、極端な専門分化をさげ、いっさいの技術を統括すべきものであるという、先輩諸賢の信念によるものであった。専門分化のはげしい今日においても、なお傾聴すべき卓見であると思う。

土木学会の略史は過去においては、創立 20 年、25 年、40 年、50 年と 4 回に亘って編集されている。本略史は 60 周年を記念して、前記の略史に続くものとして計画されたのである。本来は、60 周年に当る昭和 49 年に出版すべきところであったが、諸般の事情により今日まで延引したことを、お許し願いたい。編集は事務局の担当とし、50 周年略史を基に、昭和 40 年より 49 年に至る 10 年間の内容を中心にとりまとめ、最近の学会活動を比較的くわしく書くよう努力した。

昭和 40 年代は、日本にとって正に激動の時代だったといえよう。すなわち、40 年代前半は、万国博覧会に象徴されるように、経済は拡大の一途をたどり、希望と自信にみちみちていた。後半に至り、あまりにも早すぎた高度成長のひずみが目につくようになり、とくに 48 年の石油ショックは、急速に景気の後退と深刻な経済不安をもたらした。国民は新しい価値観を模索しつつ、50 年代を迎えたのである。この間であって土木学会は、会員諸兄の努力により、着実に発展し続け、会員数は 27 000 名と 10 年前に比べ 1.42 倍に増えるとともに、学会活動も活発に行われ、各種の委員会、講習会、出版物等も量質ともに躍進し、土木工学の発展に大きな役割を果たしてきたことは御同慶の至りである。

今後土木の分野でも、ますます専門化と総合化、環境・公害問題、開発と保全、学際的分野の研究等々、多くのむずかしい問題が提起されるであろう。それに伴って土木学会の運営も新たな転期を迎えることになるであろう。この 60 年略史が、こうした新しい動きに対する適切な指針となり、これからの学会活動の発展に役立つことを念願してやまない。

昭和 51 年 11 月

専務理事 川 越 達 雄